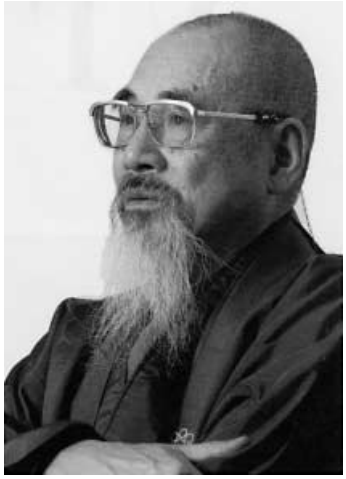
FAITH

――夏目漱石『それから』をよすがに――

生命の本質を探る



秋月龍珉

あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧

著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案―実践的禅入門』『禅門の異流――休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者―鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乗―仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

最近、英会話の本を読んでいたら、面白い話にぶつかった。日本人留学生の話。ある日、部屋でテレビを見ていると、ホームステイ先の女の子がやって来て、突然、真面目な顔で、“I need you !”（私はあなたを必要とする）という。これ、映画などでは愛の告自でお馴染みの言葉である。あまり唐突なことで驚いていると、なぜか部屋まで連れて行かれて模様替えのお手伝いをさせられたとか……。

“I need you !”は愛の告白の言葉?実は日常的なお手伝いをお願いするときの決まり文句でもあるという。「あなたが必要」には違いないが、ちょっと残念でした。（「英語 この順序で覚えれば絶対だ」かんき出版）

夏目漱石に「それから」という中編小説がある。長井代介という、三十になっても職業をもたないで、父親や兄からの仕送りで趣味的な生活をしている明治の教養人、漱石の言葉でいうと「天下の遊民」として生きている人物が主人公である。

彼、代介は、漱石のロンドンの客舎（きゃくしゃ）における経験、すなわちそれまでの「他人本位」から「自己本位」の立場に目覚めた、その「自己本位」的人物の漱石の創作における最初の収穫と目されている。

漱石はまず代介を目覚めた近代的な個人主義者、明治のインテリとして描いている。その家族も社会も国家も、いや人類の道義さえもが、ただ彼自身の生活の充実と進歩と向上のためにある。逆に人間としての彼自身が家庭のために社会のために国家のために人類の道義のためにあるのではない。彼はどこまでも、目覚めた近代的な「自我」の立場、市民社会的な個人の自由と独立の立場に立っている人間である。だから、彼が何かをしようとするとき、彼のその衝動に先立って、あらかじめ彼の生活を客観的に規制するような、いかなる価値も、いかなる法の存在も、彼は認めない。彼自身の生活は、彼自身に始まって彼自身に終わる。こういう近代的な「自我」の権化みたいな男として、代介は描かれている。これが芥川龍之介ら当時の青年たちの心をとらえたのである。

そういった代介が、ちょっとした英雄的な気分から、心ひそかに思っていた恋人の三千代を友人の平岡の妻として取り持つ。二人の結婚生活がうまく行かず、子供も死んで、平岡は大阪で事業に失敗して、夫婦して東京へ戻ってくる。生活に困った三千代は、代介に金の工面を頼む。そういう三千代の境遇に同情して助けていくうちに代介は、どうしようもない愛情を感じ始める。

一方、実業家である代介の父は、自分の事業のためもあって、地方の素封家の佐川の娘を妻にと考えるが、代介はそれを断って、三千代と一緒になることを決意する。そして三千代を呼んで、「僕の存在には、あなたがどうしても必要だ」（I need you !）と告白する。「そんなことなら、平岡と自分との間を取り持ったりせずに、なぜもっと早く言ってくれなかったのか。」と、三千代は泣いて恨むが、結局、代介の愛を受け入れる。二人は愛の幸福を味わうが、代介はこのことを平岡に打ち明けて絶交される。その平岡の手紙で、父や兄からも義絶され、一方三千代は重い病気になり、代介は新しい生活のために職業を探しに炎天下のもとに飛び出して行く……。

だいたいこういう粗筋である。

かっての恋人、今は友人の妻である三千代に、離れがたく引きつけられる自分を顧みて、代介は我とわが心を良心で責める。そして平岡をふたたび三千代の許に帰らせようとして努力する。邪（よこしま）な恋を思い切ろうという反省と、友人夫婦を元の仲のいい夫婦に返そうという努力と、そういう一切の試みが、自分が三千代に引かれていく力の前には、むなしい造作、作為（ぞうさ、はからい）にすぎないと気づいて、代介はしばらく躊躇してのち、ついに意志の人たることをやめて、自然の人になろうと決意する。

作品の中には、こう書いてある。「彼はしばらくして、『今日始めて自然の昔に帰るんだ』と胸の中で言った。こう言い得た時、彼は年頃にない安慰（あんい）を総身に覚えた。何故もっと早く帰ることが出来なかったのかと思った。始めから何故自然に抵抗したのかと思った」と。これはいったいどういうことか。

「“意志の人”たることをやめて“自然の人”になる」。「意志の人」というのは、比較的によく分かる。人妻への恋という邪まな心を我とみずから良心によって、すなわち意志的な努力であきらめようとする。ところが「自然の人」になるとは何か。これはちょっと分かりにくい。問題はこの「自然」という語にある。

代介にとって、三千代の許に帰るということはどういうことだったのだろうか。それは彼みずからの存在の根底に臨んでいる「天意」に従うか、あるいは「意志の人」として我を張り通すか。天意とは天の心、彼自身の本来の魂の故郷である「自然」。そうだ、人間の自然、本然、本性、文字どおりヒューマン・ネイチャー（human nature）である。それに反して、小さな自分の我意を張り通す、たとえそれが「道徳」という名の反省、すなわち「意志の人」としての我であっても、そうした自我の強情的努力を張り通すか、それとも人間の本然の自然に帰るかという分かれ目に立っての人生の決断。それは仏教でいう「自我」から「無我」への転回だったのである。

漱石がここで問題にしたのは、恋愛という人間の心情も、結婚という社会の掟（おきて）も、同時にそこから起こるそこなる「場所」、すなわち人間の根源的な「自然」なる本性、「仏性」（自己の「無」の場所）というものについての言挙（ことあげ）である。自分自身の存在の根底に臨む「天意」に従うか、またはその人間性の「自然」に背いて、あくまで「我意（小さな私）」を張り通すかという、岐路（わかれ道）に立っての人生決断である。漱石は最晩年の何年か、「則天去私」（そくてんきょし・天に則って私を去る）という東洋的な悟道に達して生きたという。私はそれはすでに、こうして『それから』という作品の中に予測できると思う。

漱石の、「他人本位」から「自己本位」への目覚めということは漱石学者のいうような、「幕末の江戸の旧名主の家に生まれて封建的な他律主義の中に育った彼が、明治も三十年代の欧化主義的近代化の進行の中で近代主義者としての洗礼を受けてきたのが、本場のイギリスの徹底した個人主義に触れて、改めて近代的な自我に目覚め直す思いがして、自己の立場を確認したのが、『自己本位』であって、その目覚めたはずの漱石が、そうした自我を押しつぶすような、この国のおくれ状況－明治の半封建的な天皇絶対主義－の中で、もろくも挫折せざるを得なかった。そこでふたたび東洋的な諦観の世界へと逃避したのが『則天去私』である」という、一般の漱石解釈に、私は反対である。「自己本位の立場から則天去私へ」は、そうした近代化の**挫折**による東洋的諦観への**逃避**などではなく、逆に「近代から現代へ」という私のいわゆる「後近代者（ポストモダニスト）」への先駆的な苦悩の足跡として見たいのである。それは近代化の**挫折**でなく**徹底**であったと。

「僕の存在にはどうしてもあなたが必要だ」（I need you!）というのは、一人の男性の一人の女性への愛の告白を超えて、人間性の本然、すなわち「自然（天）」への言挙げであった。これこそ「則天去私」そのものではないか。

我と汝は区別はできる（不可同）が、切り離すことはできない（不可分）。だから我々は他人を愛することによってはじめて、真の自分自身であり得る。「初めに自我ありき」ではなく「初めに我と汝の関係ありき」（M.ブーバー）である。人間とは“人と人との間柄”である。私はそこに、人間の「生命の本質」を見る。私は西田哲学の学徒だから、西田哲学的ものの見方ということを踏まえている。「生命とは何か」ということを考えるときも、「自我」からものを見ないで、「世界」（実は「場所」それも、「逆対応を中核とする場所」）からものを見る。私はそれを「空とは自他不二」という禅道仏法の「法（ダルマ）」から学んだ。大乗仏教の「空」とは、初期仏教の「無我」である。そして「無我」のとき「法（ダンマ）」が露わになる。それが「則天去私」である。そのときにのみ、人間の「自然－本来の、真の－の生命」が働くのである。